

朝をひらく

永田 円了
真国寺住職



「科学が人間の精神を非常に狭い道に導いた」と、近代批評家・小林秀雄は評した。もちろん科学が人間にもたらした恩恵は計り知れないものがある。が、果たして科学はこのままでいいのだろうか。

「組織検査の結果、5年生存率は50%、オペ前に予測していたより進んでいました」。術後の患者と家族を前に、若い医師は淡々と告げる。

「あんたね、そんな言い方あるか！お母ちゃんの前で言うことないやろ！」と、お父ちゃんは怒った。NHK朝ドラ「半分、青い。」142話でのシー

人の命の数値化

ンである。

先月、国立がん研究センターは3年生存率を発表した。5年や10年より新しい薬や治療の効果が短期間で把握できる利点があるという。ええ、ちよっと、ちよっと待った！研究者のみなさん、あなた方は生身の人を見ているのですか。がんという病のみを見ているのではありませんか。同じ病で不安を抱く人を身近にもつ者として、この問いは切実である。

数値化することで科学的説得力は増す。曇り時々雨、と言うより、雨の確率は40%と言う方が明確であろう。しかし、果たして人の命を数値化することはいかなるものか。不思議に思うことは、科学者、医療関係者の中に、生存率の公表で患者が抱く不安を考慮する声がでてこないのはなぜなのか。

かなり以前のこと、親しい友人の奥さんが妊娠された。うれしいはずなのに、当人は不安な表情である。彼女は当時うつ病を患っていた。何年も飲み続けたいた抗うつ剤が、果たして胎児に影響を与える可能性があるのか、未知の事態であった。

まずかかりつけの医師に相談した。「ううん、事例が少ないの

でなんとも……」とコトバを濁す。2人目の医師に聞いた。「それは、何%の確率で影響がでるかもしれないですね」と、石橋をたたくような返事。そして夫婦をよく知る3人目の医師は、少し間をおいて「田中さん(仮名)大丈夫、産みなさいよ」とほほ笑んで彼女の背中をたたいた。

それから7カ月、友人の家庭に玉のような男の子が誕生した。転んで前歯が欠けて歯医者にかかった以外は医者知らず、見事に成長して今は29歳の健康な青年になった。あの時、3人目の医師の励ましがなかったなら、と思うと、この青年に会うごとに人生の不思議を感じる。

人の命を預かる医療機関のみなさん、あなたは果たして科学に仕える方ですか、それとも人の命に仕える人ですか。答えは秋風によって、あなたの心に届きますように。

患者の不安を考えると